The Black Create Summoner
黒の創造召喚師
VIII

幾威空 Iqui Sera

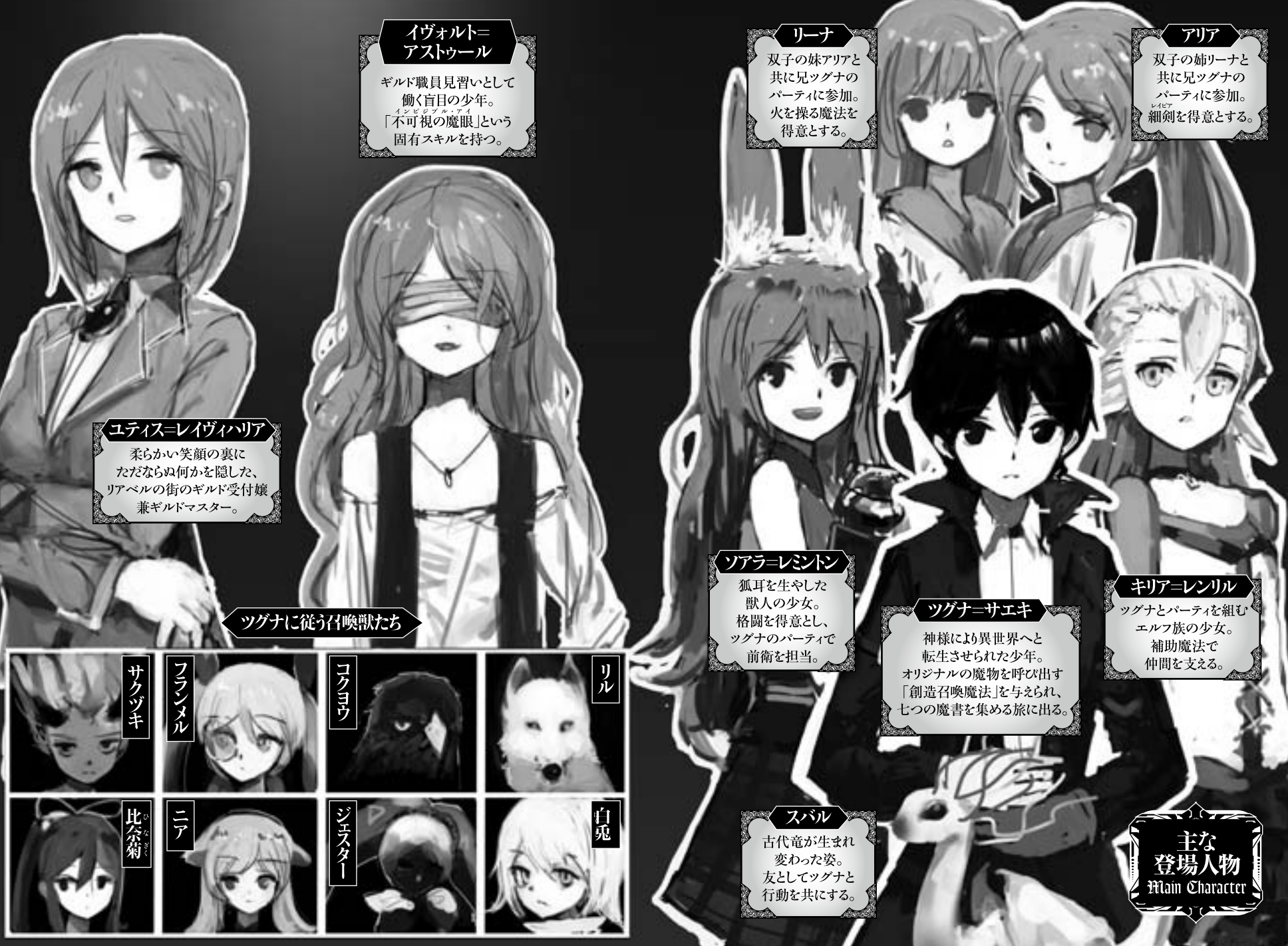
目次

本編　7

Extra Side Episode 1　――小さな守護者――　161

Extra Side Episode 2　――領主からの指名依頼――　203

ステータス紹介　275


イヴォルト＝アストゥール
ギルド職員見習いとして働く盲目の少年。
「不可視の魔眼（インビジブル・アイ）」という固有スキルを持つ。
リーナ
双子の妹アリアと共に兄ツグナのパーティに参加。火を操る魔法を得意とする。
アリア
双子の姉リーナと共に兄ツグナのパーティに参加。細剣（レイピア）を得意とする。
ユティス＝レイヴィハリア
柔らかい笑顔の裏にただならぬ何かを隠した、リアベルの街のギルド受付嬢兼ギルドマスター。
ソアラ＝レミントン
狐耳を生やした獣人の少女。格闘を得意とし、ツグナのパーティで前衛を担当。
ツグナ＝サエキ
神様により異世界へと転生させられた少年。オリジナルの魔物を呼び出す「創造召喚魔法」を与えられ、七つの魔書を集める旅に出る。
キリア＝レンリル
ツグナとパーティを組むエルフ族の少女。補助魔法で仲間を支える。
スバル
古代竜が生まれ変わった姿。友としてツグナと行動を共にする。
ツグナに従う召喚獣たち
サクヅキ
フランメル
コクヨウ
リル
比奈菊（ひなぎく）
ニア
ジェスター
白兎
主な登場人物
Main Character

本編

第1話　呪い島

「へぇ……ここがあの王様が言っていたイシュヴァリテの街か。リアベルとはまた違った賑(にぎ)やかさがあるところだな」

「キュイッ♪　キュイッ♪」

街へと通ずる門を潜り抜けた先に広がる光景を前にして、ツグナはふと感想を漏らした。彼の頭の上で翼を休めていたスバルも、長い首をしきりに振って嬉しそうな声で鳴いている。

王立高等学院を舞台とした、学外対抗戦と模造魔書を巡る戦いから早数週間。わずかばかりの休養と装備のメンテナンスを終えたツグナ達は、ユスティリア国王ガレイドルから「褒賞」として受け取った泡瀑竜(ほうばくりゅう)の居場所に関する情報を頼りに、この街を訪れていた。

イシュヴァリテは、ここイグリア大陸の南端に位置する。別名「水の街」とも言われ、街の外れには海が広がっている。コバルトブルーの水面が視界を埋め尽くすその景色は、訪れた者を圧倒し、虜(とりこ)にする。観光地として人気が高く、多くの宿泊施設が立ち並ぶリゾート地としても名が知れ渡っている土地であった。

――一生に一度でいいから訪れてみたい街。そんな言葉が昔からよく囁(ささや)かれていることからも、この街の人気ぶりを察することができよう。

陽の光を浴びてキラキラと輝く水面と、街の中を吹き抜ける爽(さわ)やかな潮風は、どこかツグナの到着を祝福しているかのようだ。

「うっはぁ～！　これは凄いね！　あの遠くに見える大きな湖みたいなものが海なのかな？」

「空気がおいしい……それに風も気持ちいいわね」

「リーナ姉(ねえ)、ここ凄いね！　海って初めて見たよー」

「そうね……ただ、嬉しいのは分かるけれど、はしゃぎ過ぎるとみっともないわよ」

ツグナの隣に並び立つソアラとキリア、アリアとリーナも口々に、湧き上がる興奮を言葉に乗せる。

レギオン「ヴァルハラ」を構成する五人は、広大な景色にそれぞれ興奮しつつも歩を進めるのだった。

◆　◇　◆　◇　◆

事の発端はおよそ数週間前に遡(さかのぼ)る。

ガレイドルの依頼により「学内選抜戦」や「学外対抗戦」にかかりきりだったツグナが、カリギュア大森林にある家に戻ってから数日が経過した時のこと。
リビングで思い思いにくつろいでいたソアラをはじめとする「ヴァルハラ」の面々に、ツグナは次に向かう街の名を告げた。
「えっ!?　イシュヴァリテって……あの海があるっていう街？」
ソアラは目を見開きながら反射的に訊き返した。他の仲間も、彼女と同じような表情でツグナに視線を向けている。
「あぁ、そうだ。王様からの情報によれば、そこに『泡瀑竜』っていう竜がいるんだとさ」
「キュイッ!?」
ツグナの口から語られた「竜」という単語に反応を示したスバルが、慌てた様子で彼の頭の上に飛び乗り、「早く行こうよ！」と髪を引っ張って催促する。
興奮するスバルをなだめるようにその身体を撫でながら、ツグナは「実際にいるかどうか確かめたわけではないらしいが」と付け加えた。
すると今度はリーナが、首を捻りながらツグナに問いかける。
「でも……兄さん。どうしてわざわざ竜に会いに？　イシュヴァリテは王都に行くよりもさらに遠い場所にあるかと思いますけど……」

もっともな質問に、ツグナは頬を掻きつつ話し始めた。
「あぁ……それは、前に俺の『魔書』が暴走して、アルガストと戦ったことがあるだろ？　あの時、アイツから言われたんだよ。『竜に会え』ってな」
「あぁ、あの時ですか……」
リーナも当時のことを思い返し、ぽつりと相槌を打つ。
それは、彼女だけではなく他の仲間にとっても、忘れようにも忘れられない激闘であった。ツグナとしては、魔書の力に呑み込まれて皆に迷惑をかけてしまったと今でも不甲斐なく思っている記憶であったが、「今は感傷に浸っている場合ではない」と気持ちを切り替えて先を続ける。
「その言葉がどうにも引っ掛かっていたんだよ。アルガストの真意は俺にはまだ分からないが、折角アドバイスしてくれたんだし、無駄だと判断する理由もないしな。空いた時間には王国の大図書室で竜に関する文献を調べたりしていたんだ。んで、今回の報酬として情報を得られたから、行ってみようと思ってな」
「なるほど。そういう背景があったんですね」
ツグナの説明を聞き終えたリーナは、納得した様子で深く首肯する。他の仲間達も軽く頷くのを目にしたツグナは、四人に向かって言葉をかけた。
「そういうことだから、俺はイシュヴァリテに行くんだが……どうせだったら、皆も一緒に行く

か？」

そんな問いかけに、その場にいた全員が嬉しそうに賛同を示したのは言うまでもない。

◆◇◆◇◆

「へぇ……店にもここの特徴が出てるな」

「キュァ！」

四人を引き連れて、ツグナは街の中を歩いていく。そうしてそれぞれの自慢の品を並べる店を冷やかす中で、ふとそんな感想が漏れた。

さすが海が近いだけあって、食料品店の店先に並ぶ商品は海産物が中心だ。また、そこかしこから食欲を湧かせる匂いと音が伝わり、鼻と耳をくすぐる。

「うわぁ……お、美味しそう」

魚が焼ける香ばしい匂いと、網から滴る脂がはじける音に、目をキラキラさせたソアラは唾を呑み込み、狐耳をピコピコと忙しなく動かす。

見るからに物欲しげな彼女を引きずりながら、ツグナ達はさらに街の中を練り歩いた。

イシュヴァリテの特徴は、食べ物だけにとどまらない。この街で購入できるアクセサリーには海をイメージした物が多いことも、特筆すべき点であろう。青を基調としたその美しさは際立っており、街の特産品となっている。ある店に陳列されていたヘアアクセサリーには、ツグナを除く四人が夢中になったほどだった。

そうして特に目的もなくいくつかの店をハシゴしていた一行に、背後から声がかかった。

「ちょっと！　そこのお嬢ちゃん達！」

声のした方に顔を向ければ、そこには前髪を掻き上げながらキラリと白い歯を見せつける、一人の男が立っていた。さらさらとなびく細い金髪に鳶色の瞳。すっと通った鼻筋に緩い曲線を描く顔立ちは、いかにも美形と言うにふさわしい類のものだ。

「ボクはこのイシュヴァリテのギルドを拠点とする冒険者――ノグラスっていうんだ。キミ達、もし今時間があるなら、そこの喫茶店にでも行かないかい？　なぁに、お代は気にしなくていい。これでもボクはCランクの冒険者だからね！」

ぐっと親指を突き立てて格好良くキメるノグラス。彼が身に着けているのは質の良い革鎧で、腰に下げた剣もそれと同等の良質なものだ。そんな装備からすると、確かに今の言葉に偽りがあるとは思えなかった。

C級の冒険者といえば、大概はそこそこに実力のある人物として一目置かれる存在である。これ

がソアラ達以外の女性だったならば、「今から目をつけておけば……」と誘いに乗る可能性もあったかもしれない。

だが――

「「「興味ナシ！」」」

四人は揃いも揃って、ノグラスの誘いを不快げな表情を添えて一蹴した。

女性陣から同時に告げられた拒絶の言葉に、ノグラスはわずかに頬を引き攣らせながらも、めげずに再度声をかける。

「ハッハッハ！　つれないなぁ……少しぐらいならいいんじゃないかい？　ねっ？　いいだろ？　そこの黒い少年は置いてってさぁ。どうせそんな大した奴じゃないんだろ？　だったらさぁ、ちょっとぐらい――」

ノグラスの心の中には、「あの少年はきっと単なる友達なのだろう」といういささかツグナを見下した思いがあった。

ソアラは珍しいとされる狐人族で、キリアは妖精族、双子のリーナとアリアも共に美少女と評されるレベルの容姿である。彼女らを上手く取り込めれば……と、ノグラスは下心を隠しながら四人に近づいたのだ。

しかし、ぽろりと口から零れてしまった言葉を聞きつけた彼女達の様子が、それまでと一変する。

「ねぇ……今、この人はなんて言ったのかな？」

「えっ？」

ソアラの呟きに、ノグラスは目を点にして返した。キョトンとした顔を見せる彼を捨て置いて、キリアやノーラ、そしてアリアからも声が上がる。

「この人――ツグナを『大した奴じゃない』って言ったわよね？」

「えぇ。私の聞き間違いでなければ」

「そっかぁ……あぁ、よかった。ボクだけ聞き間違えたかと思ったケド、合ってたんだね。ならさ、リーナ姉」

「えぇ、そうね……」

アリアの言葉にリーナは頷き、彼女に倣うようにソアラとキリアも頷く。四人の表情はそれまでと変わらないものの、発した言葉の裏に込められた思いは氷の如く冷たかった。

この瞬間、レギオン「ヴァルハラ」の女性陣の心は一つとなる。

すなわち――今すぐこの勘違いキザ野郎をブチのめそう、と。

「えっ？　何？」

四人が抱いた思いなど知る由もないノグラスは、にっこりと微笑んだ彼女らに誘われて裏路地に連れ込まれた。その表情に「まんまと引っかかった」と勘違いしたノグラスには、程なくして恐ろ

しい天罰が下る。
「……かひゅっ」
両頬を赤く腫らして地に伏せたノグラスを放置し、四人はツグナの後を追いかけていった。
ちなみに、丁度その時のツグナとスバルは、店頭に並ぶ鮮魚を手に「これは煮付けが合うか……いや、むしろ生でもイケるか？」などと献立を真剣に考えている最中であったため、四人の動向の詳細については知らないのであった。
そうした一幕がありつつも、一行はイシュヴァリテの街の外れにある浜辺へと向かう。

◆◇◆◇◆

「景色がいいなぁ……」
浜辺に辿り着いたツグナは、目の前に広がる大海に自然と笑みを零した。打ち寄せる波の音、視界に映る水平線が自然の雄大さを物語っている。
少し離れた場所では、打ち寄せる波にキャッキャとはしゃぐソアラ達の姿がある。素足で波に駆け寄り、「冷たい！」と口々に言い合う様は幼い子供同然だ。
（まぁ、はしゃぐのも仕方ないか。こんなところに来るのは初めてだろうしなぁ……）

楽しそうな仲間達の姿を遠目に眺めながら、ツグナは心中で呟く。
彼から話を切り出さなければ、ソアラ達がここに来ることはなかった。
道中で聞いた話によれば、四人とも生まれてからこれまで「海」を見たことがないとのことだった。それは彼女達が大陸の内陸部に生まれ、ツグナと出会ってからもカリギュア大森林を中心に行動していたせいだ。
ツグナにしても、地球から転生してきたこの世界で海を見るのは初めてだった。もちろん転生前には見知っていたので、彼女らほどはしゃぎ回ることはないが、転生のことは誰にも伝えていないから、知っているとは言えない。アリアから「海ってどんなところなの？」と訊ねられた際には、「バカみたいにでっかい湖みたいなところらしいぞ」と曖昧に答えるしかなかった。分かりやすく伝える言い方がこれしか浮かばなかった、というのもあるのだが。
とにかくツグナとしても、初めて目にする海と食文化、そして街並みに興奮を覚えてしまうのは無理もなかろうと思う。
「ほらほら、遊ぶのはそれぐらいにしとけよー。そろそろ行くぞ」
ツグナが声をかけると、四人は笑いながら「あぁ、気持ちよかった」と口々に言い合い、ツグナのもとに駆け寄るのだった。

◆◇◆◇◆

「あぁ？　何だと？　どこに行きたいって？」
浜辺でのひと時を終えた一行は、本来の目的である、竜が棲むと言われる場所に向かうために船を貸してくれる人を訪ね歩いていた。
「あそこに見える小さな島までいいんだ。悪いけど出してくれないか？」
そう言いつつ、ツグナはついっと指で目的地を示す。その指の先、目測で二十キルメラほど離れた場所には、水平線の上に乗る孤島がある。
しかし相手は、ツグナの指差した方向に顔を向けると途端に表情を険しくさせた。
「……兄ちゃん、悪いことは言わねぇ。あそこに行くのは止めとけ」
ガッシリとした体格の壮年男性の忠告に、ツグナは軽く肩を上下してみせる。
「それ、アンタんとこに来る前にも何度も言われたよ」
「なら――」
「ただ、俺達はどうしてもあの島に行かなきゃならないんだ。頼むよ」
ツグナが無理は承知と言わんばかりに手を合わせるも、色よい返事をもらうことはできなかった。

「勘弁してくれ。俺だって生活がかかってんだ。あの『呪い島』に誰が行くかよ」
「オッチャン、『呪い島』って？」
渋面を見せる相手にソアラが訊き返す。それに意外そうに目を見開いた親父は、ツグナを見て問いかけた。
「なんでぇ、お前ら。あの島のことを知らなかったのか？」
「あぁ。アンタの前に船を出してくれるよう交渉した連中には、皆が皆、行き先を伝えるとコロッと態度が変わって追い返されたんだよ。詳しい理由を聞こうにも、取り合ってもらえなかったんだ」
苦い顔で経緯を話すツグナを見ていた親父は、「もしかして」と思いつつさらに問いかける。
「お前ら、ここらへんの冒険者ってわけじゃねぇな」
「俺達、普段はリアベルっていう街を拠点にしているんだ。大陸の内陸部だな」
その説明でようやく合点がいった、という感じで頷いた男性は、「知らないのも無理ないか……」と零した後、一行を見回しながら拒否した理由を訥々と話し始めた。
「あの島はこの辺りじゃあ『呪い島』って呼ばれてる。『竜が棲まう場所だ』なんて古い言い伝えもある」
彼の口から出た「竜」という言葉を聞いたソアラ達は、ハッとした顔で互いに顔を見合わせた。

そんな反応をよそに、ツグナは「俺達はその竜に会いに行きたいんだよ」とこの街を訪れた目的を伝える。
「バカ言うな。ただの古い言い伝えだぞ？　それに……あんな恐ろしい場所に行こうとする奴を、誰が好き好んで手助けするってんだよ」
壮年の男は呆れたようにため息を吐きながら、ツグナ達をシッシッと手で追いやる。
（あの王様……調べさせたって言っていたけど、本当はこの言い伝えを聞いただけなのかもしれないな）
男の言葉を聞きながら、ツグナは「こりゃあ空振りかもな……」と心中で思いを吐露した。やってきたはいいものの、根拠となる情報が単なる言い伝えとなれば、信憑性を疑わざるを得ないからだ。
こんな展開は完全に予想外で、ツグナは眉を八の字に下げて残念そうな表情を浮かべていた。
（まぁここは有名な観光地だって聞いたし、美味いもんでも食って帰るか……）
頭を切り替えて今後のプランを思案していたツグナの耳に、アリアの声が届いた。
「でもでもでも！　竜が棲まう場所って言い伝えは誰も信じてないんだよね？　どうしてそれでも船を出せないって言うのさ？」
ここで引くのは何か悔しい、とばかりに不満げな態度でアリアは詰め寄る。

さすがにツグナも、彼女の責めるような口調を咎めようとした矢先――難しい顔をしてガリガリと頭を掻いていた男の口から、意外な言葉が発せられた。
「単に行くだけならできるさ。だが、出せない理由は他にもある。それは……島に行った奴には不幸が訪れるからだ」
「不幸……？　どんな？」
思わず訊き返したツグナに、親父はゆっくりと事の顛末を話し始める。
「あれは二年ほど前になるか。お前さん達のように、あの島に行きたいって頼んでくる輩がいたんだよ。もちろんその時も『止めとけ』っつったんだけどな。そいつらの中には貴族の息子が交じってな。結局、そいつが俺達の仲間の一人を金で釣ったんだ」
「よくもまぁ取り込めたな。そんなに渋る相手を翻意させたっつうことは、よほどの大金を注ぎ込んだのか？」
「だろうな。詳しいことは聞いちゃいないが、あそこには他では見られない、珍しい動物や植物がいるって噂がある。ヤツらからすれば、それだけの金を注ぎ込んでも、あの島で狩りをすれば倍になって返ってくるって寸法だったんだろうよ」
当時のことはよく分からない、と肩を竦めてみせる男に、ツグナは「あぁ、悪い」と話の腰を折ったことを軽く詫びた。

「なるほど。でも、口ぶりから察するに……そうはならなかったんだろ？」
ツグナの静かな問いかけを耳にした親父は、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべて重々しく頷いた。
「あぁ。一行が島に向かってすぐのことだったよ。それまで穏やかだった海が急に荒れ模様になってな。特に島の周辺は酷い高波で、とてもじゃないが船を操れる状況じゃなかった」
「そ、それで……どうなったの？」
これまでじっと話を聞いていたソアラが、怯えた様子で割って入る。
親父はそんなソアラの顔を見ながら、静かに口を開いた。
「――帰って来なかった」
「えっ？　ど、どういうことなの？　オッチャン」
「帰って来なかったって……」
「まさか……」
ポツリと呟かれた男の言葉に、ソアラとキリアは一瞬目を見開いて、何を言っているのか分からない、という表情になった。
その二人とは対照的に、いち早く結末を察したアリアとリーナのわずかに青ざめた顔を視界に捉えつつ、男はさらに話を続けた。

「誰も帰っては来なかったんだよ。島に行ったヤツらも、そしてヤツらの口車に乗せられて船を出した俺の仲間も、その船さえもな。唯一戻ったのは、次の日に浜辺に打ち上げられた船の残骸だけだった。分かるか？　こっからあの島までは、どんだけ多く見積もっても一日かからずに行って帰ってこれる距離だ。だが、そいつらはそれっきり二度と姿を見せることはなかった。いや……二年前のことだけじゃない。俺がここで生きてきた限り、あの島から生還した人間はついぞ知らねぇんだ。これがあの島が『呪い島』って言われる所以さ」

言い辛いことを口にしたためか、親父は一度唇を噛み締め、中断していた作業を再開する。それから硬い表情のまま、「さぁ、もう行ってくれ」と今度こそツグナ達を追い返した。

ツグナは少し離れた場所から親父をぼんやりと見つめながら、今聞いた話を頭の中で反芻した。

誰も帰ってこない呪い島――普通なら「冗談だろう」と一笑に付される与太話でしかないかもしれない。だが、あの獅子王から事前に情報を得て、以前震鉱竜アルガストにも会った経験のあるツグナの中では、「何故、獅子王の部下がこの場所を報告したのか」という疑念が解消されていた。

（なるほどな……単に言い伝えがあるってだけなら信憑性は薄いが、事実何かが起きたってコトは、「あの島には何かがある」って判断できるか）

顎に手をあてがいながらガレイドルの話の背景を推察したツグナは、「とりあえず行ってみる価値はあるか」と結論づける。

しかしそんなツグナの頭には、過去の話を語っていた際の男の真剣な表情が、しばらく残り続けていた。

『竜が棲まう場所』という言い伝えに、訪れた者に不幸が降りかかる呪い……か」

誰に聞かせるわけでもなくポツリと呟いたツグナの声は、打ち寄せる波の音に掻き消された。

第2話　島へ行く方途

「あ～ぁ、結局ここまでか～」

「ウキュゥ……」

当てもなく浜辺に立つソアラが、残念そうに嘆いた。彼女が抱きかかえるスバルからもどこか悲しげな鳴き声が漏れる。キリア達他のメンバーも言葉にこそ出さないものの、皆眉尻を下げて遠くを見つめていた。届きそうで届かない、そんなもどかしさが彼女達の胸の内に湧き上がる。

だがそれとは一線を画す態度で、ツグナは一人、地平線上に浮かぶ島を視界に収めながら思索を巡らせていた。

（……船で行く手段はもうとれないだろうな。かといってこの距離を泳いで渡るのは、いくらなんでも現実的じゃない。ならいっそ、船を作るか？　いや、それだと材料の調達から手をつけなきゃならない。時間的にも手間的にもかかり過ぎるだろうしなぁ）

「……ナ、聞……」

何か手がないかとぐるぐる考え続けても、一向に「これだ！」という妙案は思い浮かばない。時間だけが虚しく経過する中、唸りながら島を見ていたツグナの視界に、突如ソアラの怒った顔が割って入った。

「うわっ!?　びっくりした……何だよ」

「びっくりしたって……さっきから何度も呼んでるのに聞いてないのはそっちでしょ！　もぅ……そろそろお昼ご飯にしない？　って聞いてるんだけど？」

耳をピンと立たせ、ぷくっと頬を膨らませたソアラの態度は、どこか小動物を思わせる。本人は怒っていることを前面に出した気でいるのだろうが、ツグナにとっては「怒られている」という感覚すら湧かなかった。

（あぁ、うん。まぁ、あのドS女王やリリアに比べたら、なんてことないんだよなぁ……）

どこかから「比較対象が間違っているだろ」とツッコミが飛んできそうな場違いな考えが脳裏を掠めたものの、それを口に出すこともなく、素直に「悪い」と謝って軽く受け流す。

「そうだな。折角なら、街の店で食べることにするか。ここは海の近くだから、リアベルにはない料理があるだろうし、どんな味か試してみたかったんだよな」

「それもそうだねぇ……海の料理かぁ。楽しみだなぁ～」

ツグナの提案に、ここに来る前に店先に並んでいた焼き魚やキラキラと輝く活きのいい魚を頭の中に思い描いたソアラは、まだ見ぬ料理にゴクリと生唾を呑み込む。

続いて、そんなソアラの隣にいたリーナがツグナに声をかけた。

「ご飯はそうするとして……兄さん。結局、あの島に行くのはどうしますか？」

「それなんだよなぁ……」

つい先ほどまで考えていたことを問われたツグナは、「痛いところを突かれた」と反射的に顔を顰めて頭をカリカリと掻きながら言葉を途切れさす。

「悩むのも仕方がないですよね。あの島に行ける船はなさそうですし。加えてこの距離ですし……まさか、飛んでいくわけにもいかないですしね」

「――っ!?」

どうしたものか、とため息交じりに漏れたリーナのひと言に、わずかに俯いていたツグナはハッとした。そして街へと戻ろうとしていた足を止める。

「……兄さん？」

「ツグナ～？　どうしたの？　早く行こうよ！　美味しいもの、なくなっちゃうかもよ？」
「キュイキュイッ！」
「あぁ、悪い。けど……もしかしたら、なんとかなるかもしれない」
「えっ？」
「あの呪い島に、行く方法だよ」
顔を上げたツグナは、立ち止まった彼に気づいて反射的に訊き返した仲間達に対し、驚くべきことを口走った。
突如告げられてもその方法に見当もつかない四人の頭の中には、「本当にできるのか？」と疑問符が浮かぶ。
「行けるって……あの島にですか？」
「で、でもさツグ兄（にい）……どうやって？」
率直な疑問をぶつけてきた双子の妹達に、ツグナはニヤリと笑みを浮かべながら言葉を返す。
「どうやってって……さっきリーナが言ったじゃないか」
「えっ!?　さっきって……」
「……何だっけ？」
なおもツグナの意図が分からず小首を傾げながら唸る一同に、ツグナはピッと指を立てて答えを

告げた。
「海を渡れないのなら、空を飛んでいけばいいんだよ」
その予想だにしないひと言に、仲間達は皆ポカンと口を開けて佇（たたず）んでいた。

◆　◇　◆　◇　◆

昼食に行こうとせっつくソアラ達をなんとか押しとどめ、浜辺の外れにやってきたツグナは、周囲に視線を這わせ始める。
「兄さん？　さっきのはどういうことですか？」
「そうだよツグ兄。『飛んでいく』って言ったって……どうやるの？」
リーナの問いかけに乗るように、アリアが手をかざしながら遠くに見える「呪い島」を眺めて訊いた。
ソアラから同様の質問を投げかけられていたキリアは、眉根を寄せてお手上げとばかりに首を左右に振りながら口を開く。
「そうね。泳いで渡るのなら、まだ分かるけれど」
「だよねぇ？　やってみるのもいいけど、先にご飯食べてからにしようよぉ～。もぅお腹ペコペコ

だよ～」

若干一名から場違いな発言があったものの、ツグナは彼女らの言葉をただ黙ったまま受け止めていた。そして、周囲に自分達以外の人影がないことを確認すると、これが答えだとばかりに左腕から魔書《クトゥルー》を引き抜き、とある従者の名を告げた。

「ちょっくらひと仕事頼むよ――コクヨウ」

直後、ツグナの言葉に応えるように、青白い燐光を伴いながら魔書の中から姿を現したのは漆黒の鷹――コクヨウである。

「お呼びですか？　我が主」

「あぁ。コクヨウ、俺を乗せてあの島まで連れていってほしいんだ」

目的地の島を指差しながら告げるツグナに、アリアが驚いて声を上げる。

「ちょ、ちょっと待ってツグ兄。コクヨウの背にツグ兄が乗るっていうの？　いくらなんでも、その体格差じゃあさすがに無理なんじゃない？」

「――と、言われておりますが。どうしますか我が主？　確かに、このままではさすがに小さ過ぎて主を乗せることは無理かと思いますが」

それを聞いたコクヨウが、ちらりとツグナを見やりながら話を振る。

トスを受けたツグナはニヤリと不敵な笑みを浮かべ、自らが持つ唯一の魔法である《創造召喚魔法》の力の一つを行使した。

「小さくて乗せられないってなら、大きくすりゃあいいだけだろ？　――『拡縮自在』」

そっと呟いた瞬間、コクヨウの身体はみるみる大きくなり、ついにはツグナの身長を超えるサイズとなった。

「……」

巨大なコクヨウを前に、もはや何か言うことすらできず、ただ呆然とするアリアとリーナ。立ちすくむ二人とは対照的に、キリアとソアラは「あぁ、確かこんな姿も見たことあるような……」とどこか懐かしげな表情を見せている。

「これが答えさ。俺の持つ《創造召喚魔法》の一つ――拡縮自在。これは呼び出した者の体格を今のように大きくしたり、逆に小さくしたりする力なんだ。これで大きくしたコクヨウに乗って、あの島まで行こうってワケさ」

自信満々で告げるツグナに、キリアが恐る恐る声をかけた。

「も、もしかして……私達も一緒に乗れだなんって言わないわよね？」

「あ～、まぁ、乗りたいのならそれでもいいけど？　どうする？」

首を傾げて訊ねるツグナに、キリアは大きく手を振って拒絶の意を示した。

「じょ、冗談じゃないわよ！　もう二度とあんな高っかいのは勘弁願いたいわ！」

過去に一度だけ、大きくなったコクヨウの背に乗って移動したことのあるキリアは、当時の状況を思い返して叫んだ。どうやらその経験が相当なトラウマになっているらしく、彼女の態度からは強烈な意志が感じられる。

「キリアは乗ったことがあるの!?　いいなぁ～。ねぇねぇ、どうだった？」

目を輝かせながら興奮した様子で問いかけるアリアに、キリアは顔を顰めて「あれは経験しないと分からないわよ……」と呟くのみだった。

◆◇◆◇◆

「それじゃ、行ってくる。到着したら門（ゲート）を開いて迎えに来るから、少しの間ここで待っていてくれ」

「了解！　なるべく早くね！」

「リーナ、アリア、スバルも気をつけてね」

ピコピコと小刻みに耳を動かしながら満面の笑みでツグナに返事をしたソアラに対し、その隣のキリアは不安そうな表情で声をかけた。

「心配いらないわよ。兄さんも一緒だし、それほど時間はかからないだろうから」

「そうだよキリア。そんなに心配するようなことじゃないって」

「キュイッ！」

大きくなったコクヨウの身体を撫でながら、リーナとアリアが微笑む。スバルは定位置であるツグナの頭の上で大きく胸を張りながら、「心配いらないよ！」とばかりに力強く鳴いた。

そしてキリアの不安をよそに、三人と一匹は紺碧（こんぺき）の海上へと舞い上がった。

「うおおおっ!?　と、飛んでる！　飛んでるよ、リーナ姉っ！」

「そ、そそそうね！　こんなに高いなんて、予想外だけど……」

「キュイイイッ！」

初めての経験にはしゃぐアリアとは対照的に、遥（はる）か足元の海を見て表情を引き攣らせるリーナとスバル。双子にもかかわらず正反対の反応を見せる妹達を目の端で捉えたツグナは、「まるで子供だな」と密かに微笑んだ。

青い海の上を、漆黒の鷹が飛んでいく。そうして十五分後。浜辺からは小さな点でしかなかった「呪い島」の姿が次第に大きくなってきた。

「主、もうすぐ目的地に到着します。着地の際には大きく揺れることがありますので、お気をつけください」

「はいよ。了解」
コクヨウの呼びかけに返事をしたツグナは、眼下に広がる景色に目を移した。
紺碧の海原に、一つの島が浮かんでいる。あの壮年男性をはじめイシュヴァリテに住む住民の多くが「呪い島」と呼ぶ、ほぼ円形の島の中心部には火山と見られる山があり、その周りを森が囲っていた。また、島の周囲は岩礁（がんしょう）地帯になっているのか、ゴツゴツとした岩が海上に点々と見受けられる。
「結構岩場が多いな。着陸はできそうか？」
「スペースは狭いですが、砂浜があります。そこならばなんとか」
「了解。お前は着陸に専念してくれ。こっちは周囲からの攻撃に対処できるよう、警戒しておくから」
「かしこまりました」
打てば響くタイミングの返事を合図に高度が下がり始め、足元にあった島が段々と大きくなってくる。
「おおっ!?　着陸っ！　あの島にはどんな怪物（モンスター）がいるのかなぁ～♪」
「ちょ、アリアっ!?　そんなことを言っている場合じゃ……ぶ、ぶつか――っ！」
「キュイッ!?」

未知の場所を探索することに興奮するアリアと、急激に地面が迫ることに涙を浮かべて絶叫するリーナをよそに、コクヨウはその漆黒の翼を広げて無事に着陸を果たした。
「キリアのあの顔の意味が……今分かった気がするわ」
「あ～楽しかった！　また機会があれば乗ってみたいなぁ～」
「よし、無事に到着したか。って……二人とも、気を抜くなよ？　ここにはどんなモンスターがいるか分からないんだからな」
砂浜に降り立った三人は、それぞれの思いを口にしながらも気持ちを切り替えるのだった――

第3話　古代竜が導く先

「うわぁ……ここが、あの『呪い島』かぁ～」
「見た目は普通だけど……ね」
ソアラとキリアは周囲を興味深げにキョロキョロと見回しながら、ポツリと率直な感想を口に出す。
呪い島に到着してすぐ、ツグナはジェスターを召喚して門（ゲート）を出現させ、イシュヴァリテの浜で待

機していた二人を呼び寄せた。
今、一行の前には鬱蒼と木々が茂り、浜からの潮風に吹かれて木の葉が揺れている。その茂みの奥からは獣達の息遣いが微かに聞こえ、やってきたツグナ達を警戒しつつ観察するピリピリとした緊張感が伝わってきていた。
彼らの様子を窺う気配は一つや二つではない。優に三十は超えるであろうそれらに、巷の冒険者ならば、恐怖で顔を引き攣らせていただろう。
だがこの場にいる面々は、「魔の森」と恐れられる場所で日常を過ごす猛者達だ。普段から森に親しむ彼らにとってみれば、この程度の緊張感などさしたる問題ではなかった。
「さてと。全員いるな？　なら、ここらを探索して竜のいそうな場所を――」
集まったヴァルハラの仲間達に向け、ツグナがこれからの方針を伝えようとした矢先、不意に突風が襲いかかった。
「うわっ!?　な、何だ!?」
一陣の風によって舞い上がる砂に対して、ツグナは咄嗟に腕で目を覆う。
「ちょ、ちょっと何これ！」
「くっ……」
「うわぁっ！」

「アリア!?　くっ……」
ソアラはブツブツ文句を垂れながらも耐え、キリアは歯を食いしばって耐える。アリアやリーナは身体が吹き飛ばされそうになるも、剣や杖を地に突き刺して耐え忍んでいた。やがて風が収まったその時――
「――キュッ!?」
それまで翼を盾に砂塵を防いでいたスバルが、突如驚いた様子で長い首をしきりに左右に振った。ただ、それは単に驚きだけではなく、どことなく嬉しさが滲むものであった。
「……どうした？」
何度も辺りを見回しては、時折遠くにいる誰かに聞かせるように鳴き声を上げるスバル。遠吠えにも似たその声に、ツグナが恐る恐る訊ねると、スバルは鳴き声を上げることを止め、じっとツグナの顔を見つめながら言葉を零した。
「よ……んで、る。なかま、が……いる」
普段は滅多に喋らないスバルの口から告げられた、「仲間」という言葉。それを聞きつけた面々も驚いた様子で辺りを見回す。しかしながら、どこにも竜の姿を捉えることは叶わず、次第に「聞き間違いだったのでは？」と思われ始めた。
瞬間、優しげな風が一同の頬を撫でた。先ほどの突風とは異なる、全身を包み込むような風が海

の彼方へと消えていく。
「――ッ!?　こっち！」
訝しむソアラ達を差し置いて、スバルは風の中で微かに捉えた声を必死で辿っていく。ツグナもこれまでにないスバルの慌てように戸惑いつつ、その後を追いかけた。
「はぁ……もう仕方がないわね」
何も言い残さずに走り去ったツグナにため息を吐きながら、キリアもまた彼と同じ方向に進路を取る。
「ほら、アリアも行くわよ」
「えっ、ちょっ……！　待ってよリーナ姉っ！」
キリアに続けとばかりに、杖を持ち上げたリーナと細剣を納刀し終えたアリアが駆け出す。
「ふえええぇっ！　置いてかないでよ～！」
双子の姉妹に後れを取ったソアラも、目の端に小さな涙を浮かべながら走り出すのだった。

森の中で時折立ちふさがるように現れるモンスターを斬り伏せながら、五人はスバルを先頭に森の中を駆け抜けていく。そんな一行を待ち受けていたのは、島の中央にある山の一角にひっそりと開いた洞窟の入口であった。

◆◇◆◇◆

「チィッ！　数が多いな。ソアラ！」
「了解っ！　行っけぇ！　――天鋼糸断！」
暗く細い一本道が続く洞窟の中を、ツグナは愛刀である瞬華終刀を縦横無尽に振るい、襲い来るモンスターを次々に蹴散らしつつ進んでいた。
つい先ほど彼らの前に姿を現したのは、ブラックバットと呼ばれる、蝙蝠を人間の幼児サイズにまで大きくしたモンスターである。名前の通り、全身を真っ黒に染めた生き物で、洞窟などの暗闇を好む習性を持っている。
特徴的なのは、ほとんどの動物にあるはずの目がないことだ。これはブラックバットが持つスキル「反響測定」に関係しており、発達した耳と自らの鳴き声で対象の位置を正確に特定することができるからだった。
暗闇に慣れていない者ならば、闇に溶け込み、死角から獲物を仕留めるその術中に簡単に嵌まるだろう。だが、ツグナ達は正確にブラックバットの位置を把握すると、ソアラのアシストで動きを封じ、一刀両断に斬り伏せた。

「大丈夫？」
「あぁ。寄って来たヤツは全部片付けたよ」
松明を持つキリアが、暗がりにいたツグナに尋ねる。照らされた周囲に問題がないことを確認したツグナは、刀に付いた血を振り落とした。
この洞窟に入る前の森でも、ツグナ達は数々のモンスターを倒していた。ゴブリンなどの比較的馴染みのあるものや、ワーウルフと呼ばれる狼のモンスター、ソリッドアウネラという酸性の粘液を吐き出す植物型のモンスターなどである。
これらのモンスターは、他の地域でも棲息が確認できる存在だった。ゴブリンのランクは高くてもせいぜいE、ワーウルフとソリッドアウネラはDと、時折ギルドの討伐依頼で目にする種類に過ぎない。
この程度の相手ならば、メンバーの誰に討伐を任せても問題はない。実際、五人で代わる代わる相手をしていたのだから。これほどの余裕を持てるのは、ツグナに限らず、ソアラ達もまたカリギュア大森林の中を日頃から駆け回っていることが可能にさせた芸当である。
しかし、人の手が入っているはずもない洞窟の内部には灯りもなく、進めば進むほど暗闇は容赦なくその色を濃くしていく。リーナが火系統魔法で作った松明がなければ、もはや一メラ先も見えない状況であった。

そんな状況では、ソアラ達も十全の力を発揮することができずにいた。
しかし、だからといってツグナ達が歩みを止めることはない。
「ううっ……暗いよぅ……」
真っ暗闇にそこはかとなく恐怖を感じるのか、いつもはピンと立っているソアラの狐耳も、今ばかりはヘタリと頭の上に力なく倒れている。
「まったくね……この暗闇だと、一歩歩くだけでも神経を使うわね」
「そうだよねぇ……リーナ姉の言う通り、まだ入ったばっかりなのにもう疲れてきてるもん」
げんなりとした顔で不満を吐き出すリーナに賛同しながらも、アリアは周囲の警戒を怠らない。
魔法による灯りで視界は確保できるものの、その灯りに誘われるようにモンスターが寄って来る。進行ルートと危険な場所の確認、そしてモンスターの排除……この場所の攻略は、C+ランクの冒険者でも苦労するレベルであろう。
「にしても、この暗さは厄介だな」
ツグナが渋い顔で頭を掻く。この環境下に棲息するだけあって、先ほどから相対しているモンスターはどれも気配を感知することに長けたものばかりであった。
他の冒険者ならば、既に神経が擦り切れ、身体を襲う疲労に音を上げているだろう。しかしツグナはある程度の疲労感こそあるものの、歩けなくなるほどではない。それは彼の有する「気配感

知」というスキルの恩恵があるからだ。
　このスキルは、視界が利かない状態でも、的確に相手の位置を特定できるものである。おかげで戦闘では不意打ちされる状況に陥ることがなく、洞窟内を歩き回るのにもさほど支障はなかった。
　かといって、他の仲間達はそのスキルを持っていないため、どうしても進行速度は遅くなってしまう。
「そうだね。モンスター単体での脅威はそれほど高くはないけど、この暗さだとね……死角から襲われたら、対処のしようがないもんね」
　ツグナの言葉に、傍らにいたアリアがややげんなりした様子で同調する。
「暗闇だけじゃないわ。ここは足場も悪いわね。よくよく注意しないと突き出た岩に足を取られかねない。まさに天然の迷宮ってところだわ」
　松明を持ったキリアが洞窟の壁面や足元を照らしながら、さらに一行の気を重くさせる言葉を発した。洞窟内の壁は突き出た岩でゴツゴツとしており、足元には大小様々な岩石がそこかしこに転がっている。
　暗闇に加えて悪路も重なったために、ソアラ達の表情には疲労の色が濃くなり始めていた。
「でも、もう大分奥まで来たと思うのだけれど……まだ先が続いているのかしら？」
「さぁ……この洞窟がどこまで続いているかなんて分からないわ。ただ、さっきからスバルがそわ

そわしているのよね……」
　キリアがスバルを見ながら答える。当のスバルはちらちらとツグナ達を見ながら「早く！　早く！」と急かしていた。
「う～ん。確かに大分進んだとは思うんだけどな……」
　ツグナはそんなスバルに追い立てられるようにさらに奥へと進む。
　それから幾度かのモンスターとの戦闘を経ながら、暗闇の中を小さな光源を頼りに進んでいった彼らの前に待っていたのは――
「うおっ!?　こりゃ広いな……それにあれは――水晶、か？」
「はぇ～、綺麗……」
「これは……凄いわね」
「――こんな場所があるだなんて」
「リーナ姉、すっごく綺麗だね！　うっはー！」
　天井から無数の水晶が伸びる、巨大な空間だった。
　天井付近にある壁面の裂け目から太陽の光が降り注ぎ、それが当たる角度によって、水晶は赤、青、緑と色とりどりに光り輝く。
　まるで別世界とも表現できる幻想的な光景に、ツグナ達はしばしの間、ここに来た目的も忘れて

ただ見入ってしまう。
そんなツグナ達の耳に、ふと声が届いた。
「うん？　……誰だ？　我の住処に土足で上がり込んで来た愚か者は」
「キュルイッ♪」
ズシリと腹の底に響く重低音が、ツグナ達を現実に引き戻した。広々とした空間にこだまするその声の調子は、やや刺がある。
反射的に身構えるツグナ達だったが、スバルだけは嬉しそうな鳴き声を上げていた。
「うん……？　この声は――」
広間の奥にある暗がりから、地を震わせながら進み出て頭部を覗かせたのは――光沢を放つ淡い水色の鱗を纏った、巨大な竜であった。

第4話　竜の試練

イシュヴァリテの住民から「呪い島」と呼ばれる孤島。そこで見つけた洞窟を進んだツグナ達を出迎えたのは、色とりどりの水晶が天井から伸びる巨大空間だった。煌びやかな水晶はさながらシャンデリアで、どこかの御伽噺にも出てきそうなその光景は見る者を圧倒し、ここがモンスターの蠢く危険地帯だということを忘れさせてしまう。
そして、そこに現れた一体の竜。
その鱗は、雲一つない澄み切った空の色をそのまま宿したかとも思えるほどだ。一枚一枚があたかも稀少な宝石のようで、見る者を惹き付けずにはおかない魅力を放っている。
「これが……あの――」
「はわわわわ……」
自分達の背丈の十倍に近い巨大な竜を目の当たりにしたキリアとソアラは、歯をカチカチと鳴らして慌てふためく。
「リーナ姉……これはちょっと」
「えぇ。想像以上ね」
リーナとアリアの双子姉妹も、威風堂々たる姿のこの竜が持つ力を嗅ぎ取ったのか、思わずそれぞれが携えている武器を握り締めた。
――強者。
恐怖の象徴とも言えるカリギュア大森林を日常的に駆け回り、ハイレベルのモンスターを相手に戦うソアラ達でさえも、脳裏に浮かんだのはこの言葉だった。

立ち読みサンプル
はここまで